

ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 又 吉 裕 子



2006年4月から半年間、毎週木曜日と金曜日の二日間、ポリクリ実習を行った。基礎実習ではマネキンを相手にしてきたが、ポリクリ

では初めて人を相手に実習を行い、毎日が緊張の連続だった。4年生までは、歯学部学生であるという実感があまり湧かなかつたが、ポリクリ実習が進むにつれて実習の内容も臨床に則したものになり、充実した日々を送ることができた。教科書に書いてあることを予習するだけでは実際の現場ではまったく使い物にならず、予習によって覚えた事柄を、手を動かして体に覚えさせることで生きた知識となった。前年度まではトライアルだったOSCEが、今年からは本格的に実施されるということで、各科での実習内容もOSCE課題を重視した内容だった。

● 歯の診療室

自分の所属していたF班では、まず歯の診療室からローテーションが始まった。ここではまず診療時における基本姿勢や、ミラーを用いた形成法を学んだ。ここで学んだ基本的手技は、今日の臨床実習でも大いに活用されている。次いで、レジン充填、歯内療法実習を行った。これらは、基礎実習でも行っていたため、手順や器具についての不安は無かつたが、今回はマネキン相手では無く患者様を相手にするため、実習にも力が入った。また、人を相手に初めて印象を取り、先生方が日常的に行っている基本的な操作も経験に裏打ちされたものであり、私たちが取ったものとは雲泥の差であった。口腔内診査の際には、何も考えずに口腔内をよく見ようとして頬粘膜をいたずらに引

つ張り、患者役の人を不快にさせてしまった。今まではマネキンを相手にしてきたため、ミラーの使い方やバキュームの当て方等には気を配ることはほとんど無かつたが、初めて『人対人』の実習を経験して、それらがいかに大事かということを実感した。

● 歯周病診療室

歯周病診療室では、OSCE形式の対模擬患者実習（歯周病の説明、ブラッシング指導）を行った。ここでは、自分の知識（専門用語）を、いかにして分かりやすく相手に伝えられるかが重要な課題だった。回数を重ねる毎に説明はうまくなったが、画一的になりがちで患者一人一人の口腔内の状況を考えて説明することが大事だと実感した。ここでのOSCE形式の実習は現在の臨床の現場でも非常に役立っている。

その他には、スケーリング実習において、初めて浸潤麻酔を経験した。予習はしたつもりだったが、カートリッジを手にするると緊張し手が震え、頭が真っ白になってしまった。浸麻針の予想外の硬さにとまどい、針を刺す深さもよく分からなかつた。歯科の分野では浸潤麻酔は頻繁に用いられるので、臨床実習の前に練習することができて良い経験となった。

● 画像診断診療室

画像診断診療室では、歯科治療を行うにあたって必要不可欠なレントゲン撮影を実習した。これまでは、撮影法、読影法、セファログラムのトレーズ（矯正学）など座学主体であったため、実際の撮影は初めてであった。理屈ではわかっているつもりでも、フィルムとコーンを正しく位置付けることが難しかった。反対に自分が患者役で撮影されている時は、フィルムを口腔内で保持したまま開口する事がとても苦痛であった。さらに、大臼歯の撮影時には嘔吐反射が起こり、不快な気持ちになったので、自分が次に患者様のエックス線撮影をする時にはその経験を生かして素早

く正確に撮影することを心がけようと思った。

●総合診療部

総合診療部では、OSCE形式に則って医療面接の手順や対人コミュニケーションを学んだ。医療面接では、実際のユニット上で限られた時間の中で必要な情報を聞き出す訓練を行った。患者の言うことをただ漫然と聞いているのではなく、適切な時に適切な質問をすることの重要性を学んだ。適切な対人空間の確保や、非言語的コミュニケーション、アイコンタクトなどの重要性についても学ぶことができ、基本的ではあるが、医療人として非常に大切なことを習得し有用な時間を過ごすことができた。

●口腔外科

ポリクリの中で最も印象に残っている科である。ここでは、バイタルサイン、採血や外科基本手技、そして4種の伝達麻酔を行った。その中でもやはり伝達麻酔は別格で、ポリクリ至上、もっとも強烈なインパクトを受けた実習だった。下顎孔伝達麻酔においては、例に漏れず予習はしていたが、いざ実際の人に打つとなると失敗した時のイメージが先行し、なかなか思い切って刺入することができなかつた。三次元的な空間の把握が難しく、躊躇しているとライターの先生が指導してくださり、一応の成功を収めた。人間土壇場になると人格が豹変する者もあり、あまりの伝達麻酔の恐怖に相互実習中のペアの仲が険悪になる人たちもいたが、全体を通して口腔外科の実習は得るものが多かった。

約半年間のポリクリを終えた今、そこで学んだ基本的手技や、半年間かけて培ったコミュニケーションスキルは臨床実習における全ての基本となっており、現在はその上に得られた知識と経験を少しずつ積み重ねている。毎日が新鮮で、分からないことも多いが、分かった時の感動と患者様の笑顔が原動力となっている。臨床実習も早2ヶ月が経ってしまい、残りの1年もあつという間に過ぎ去るのではないかと思っているが、現在は総診での慌ただしくも充実した日々を送っている。

ポリクリを終えて

歯学科5年 大倉直人



さて、そもそもポリクリってなんだろう。僕のスタートはそこからでした。何の略なのだろうか？（インターネットで調べたら polyclinic だそうです。本当なんでしょうか？）どういったことをするのだろうか？ この四字にはいろいろな謎が含まれているような気がしていました。誰もがポリクリを訳すと「臨床実習」やそれに近い単語を出すでしょう。僕も恐らくポリクリを知らない人にポリクリを聞かれたらそう答えるでしょう。でも、ポリクリの本当の意味を知っているヒトはいないんじゃないかと思います。

ポリクリとはそんな不確かさの中でスタートさせた実習でした。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」ではないけれど、一本の細い糸を手繰り寄せ、そしてその上にある煌びやかな楽園を目指していく最初の選択扉のような気がしていました。最初に手にしたピンクの冊子。そこには様々な事が書かれており、ただただ読むでは頭の上にクエスチョンマーク。そして、教科書を引っ張り出してはリサーチ。数十分後、疲れ果て、教科書を顔にのせ深いため息。そして少しずつ事の重大さと緊張感を感じながら、僕は襲い束の間の逃避行。きつと、こんな光景を家でしていたのは僕だけじゃないでしょう。そう願いたいものですが……。

そんな現状だったので、地球の自転を何らかの力やサイキネシスみたいな能力によって反対にすることで時間流を逆にし、そしてその時間を再構成できないものかと中学生時代に考えそうなことを真剣に考えていました。まあ、そんなくだらないことを考えている時間があるならば、その時間をもっと有効活用すればいいのではという賢い意見が飛び交いそうですが、それは先程も述べたように現実逃避。僕が得意とする脳の現実逃避なのです。とりあえず、「復習すべきことは多すぎる」そんな結論を出した僕は、得も言えぬ爽快感に浸

ったのを覚えております。結局僕は、少しずつ総復習をするということでケリをつけたんだと思います。時間的猶予を考慮するとそうするしかなかったんでしょう。もともと僕は無駄というものに絶対的重要度を高と設定しているため、もっとも適した抜け道だったと思います。そしてついに、あやふやな頭脳と脆い精神力を携えて、いざポリクリ実習へ。

正直、しんどかったです。臨床に一番近い実習。相互実習。様々なプレッシャーとの戦い。思うようにできないジレンマ。臨床にあがる最終実習。うまく自分を表現できなかつたことに苛立ちをおぼえていました。授業で習ったはずなのに覚えていない。授業で習っていない。実習でやったはずなのに出来ない。そう、つまりあやふやな頭脳が悲鳴をあげていたんだと思います。苦しかった。とにかく苦しかった。そして怖かった。体重も5kg以上減りました。ただでさえ痩せていた僕が、更に体重が減ったのには自分でもびっくりしていました。まだまだ痩せる部分があるんだと。女性の方々から苦情がきそうなのですが、本当です。こうして振り返っても、僕にとってポリクリは難敵だったんだなあと思います。

中でも最大のインパクトを僕に残した一つに相互実習の麻酔投与があげられます。この実習は僕だけでなく誰もが心に残る実習ではないでしょうか。うん、きっとそうに違いない。めちゃくちゃ怖い麻酔投与は合計3回程度行つたと記憶しています。このあやふやさこそ、いかに麻酔実習が僕にとって過酷なものであり、そして精神力を削る戦いであつたかを物語るでしょう。換言すれば、嫌なことは早く忘れたいというわけです。他人に針を挿入するときのドキドキは今でも忘れることはできません。もちろん、逆も然り。そう、他人に針を挿入される時の方がドキドキしていたと思います。初めて麻酔をする者同士。疑心暗鬼に陥るのは必然であり当然です。相手が僕と同じくらい麻酔の勉強をしてきてくれたのか、ぶっつけ本番なのか、もしもの時の対処法は頭に入っているのか。憶測と期待、そして不安を相手に眼で伝達していました。サッカーでいうところのアイコ

ンタクト。麻酔を受ける側の同級生はみんなが麻酔を受けることを恐怖に思い、そして麻酔をする側はその思いを痛いほど受け止めていたことでしょう。そのせいかわかりませんが、自ずと雰囲気は重苦しいものとなっていました。また、このとき受けた麻酔の痛みは、何か特別な事を僕に教えてくれたと思います。不安や期待。そんな単純な言葉で表すことはできません。相反し錯綜する感情というのは、いつも僕に困難さというものを増加させるとともに、解決する度にひとつひとつとして成長させてくれるものだと思っています。今回の麻酔実習はたくさんの事を考えさせられ、そして僕にとって歯科医師になるにあたり重要なファクターの一つになったといっても過言ではないでしょう。浸潤麻酔、伝達麻酔。今では、「浸麻」あるいは「伝麻」と略して同級生たちと会話していますが、こうした実習の積み重ねによって少しずつですが成長しているのかなと思います。思いたいだけかもしれませんが、今回経験したこのことを臨床にあがってから忘れずにいることを願うばかりです。

また、義歯のポリクリも僕の中では印象深い実習のひとつです。義歯製作に必要な過程に個人トレー製作があります。その個人トレーを当たり前ですが僕が製作したわけです。しかしこれが思っていた以上に難しい。印象（歯型のこと）を採るのも一苦労（自分ではなくパートナーの印象を採りました）。何度も満足いく印象が採れず相手の同級生には迷惑をかけた放しでしたが、最大の失敗はトレーから印象材料のアルジネートが外れ、ピンク色の印象が歯にくっついて生じてしまったことです。僕の大失敗です。パートナーには申し訳なかったのですが、大爆笑。周りの同級生も大爆笑。やられたパートナーもアルジネートを上顎につけたまま怒りながらも苦笑。刹那の休息だったように思います。今振り返ると、患者様に同じ事をやっていたらと考えるとゾッとします。

臨床に向けて、治療を行うに向けて、単純な思考回路では歯が立たず、患者様は何を求め、何を感ずるのか。そういった、最深部を補う能力が非常に必要なんじゃないかと思いました。多忙とい

う名に安心感を求め、それにしがみつただけでは
意味がないんじゃないかと思います。大切なこと
を正確に感じ取り、それを迅速に実行できる能力

をこれから少しずつだと思うけど、こなしてい
きたいと思います。

